

働く人の健康を考える

ワーク&ヘルス

広島市南区金屋町8-20 TEL 082-264-4110

郵便振替口座 01310-9-42400

目次

◆ 10. 9石綿大阪泉南訴訟

最高裁判決「国に責任」

◆ 特集

「8・20 集中豪雨」災害救援ボランティア活動から
—とにかく出来ることをしなけりゃー

2014年11月10日

第234号

広労働安全衛生センター

10. 9 石綿大阪泉南訴訟 最高裁判決「国に責任」

大阪南部・泉南地域のアスベスト（石綿）加工工場の元労働者らによって起こされた集団訴訟上告審判決が10月9日、最高裁は石綿による健康被害について国の責任を初めて認める判決を行った。

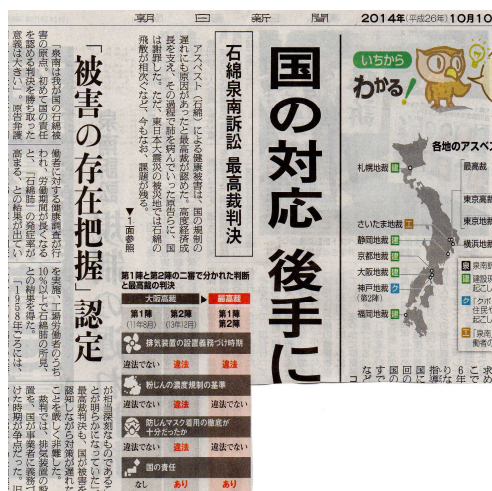
判決は国の規制が合法か否かを判断する基準として「規制は労働者の生命、身体への危害を防ぎ健康を確保するため、できる限り速やかに適時・適切に行使されるべきだ」としている。

そのうえで、国は1971年、工場内の粉じんを取り除く排気装置の設置を義務づけたが、最高裁は「58年には石綿の健康被害は相当深刻だと明らかになっていた。速やかに排気装置の設置を義務づけるべきだったのに、71年まで行使しなかった」と指摘し、「規制しなかったのは著しく合理性を欠き違法だ」と判決は述べている。

これによって2審での「産業発展のためには多少の生命・健康犠牲はやむを得ない」とした大阪高裁判決は否定され、人命尊重が優先されることが確定した判決だといえる。

しかしながら、その一方で「粉じん濃度の規制」や「防じんマスク使用の義務について」の判決は、むしろ大阪高裁判決より後退しているといっても過言ではない。判決は粉じん濃度について「著しく合理性を欠くとまでは認められず、違法とは言えない」とか、防じんマスクについては「補助的な手段に過ぎない」「国の賠償責任を否定した高裁の判断は、結論において是認できる」とまで述べている。

この判決の確定によって現在、全国各地で建設労働者が訴えている「建設訴訟」にどの



ような影響を及ぼすのか不明である。

ある新聞は「高裁判決が最高裁でも維持されると、建設訴訟への影響は計り知れない。だが、最高裁が認めたのは排気装置の設置についてのみ。これは工場内の規制なので、建設訴訟には関係ない」と評価されている。

その一方で「防じんマスクは補助的手段にすぎない」と述べており、建設訴訟は予断を許さない状況にあるといえる。

「8・20 集中豪雨」 災害救援ボランティア活動から —とにかく出来ることをしなけりゃー

これまでかって聞いたことのないほどの不気味な雷雨と稲妻、猛烈な雨。8月19日、20日の深夜から午前4時頃まで、その嵐の中で眠れないまま懐中電灯で照らした外の状態は月並みの表現であるが、叩きつけるような雨と打ち上げる水しぶきと稲光、一体どうなるのかとの不安のまま朝をむかえた。

あけてのテレビ報道は、大田川をはさんで真向いの阿武山頂上付近からの幾筋もの山崩れの茶褐色の流れと眼を疑うような災害の状態。テレビから眼が離されない。頭上は飛びかうヘリコプターの音。安佐南区緑井、八木方面の被害はどれだけの惨状なのか。八木に住む妻の友人夫婦（私も知っている人だが）が被害にあったのでは、との問い合わせの電話が鳴りっぱなし。（結果は2人とも土石流に巻き込まれ死亡されたことは後日判る）



そして全国の友人から“大丈夫か”との電話。東北から沖縄まで。ほんとうに感謝で一杯。“大丈夫”と返事をしつつ、安佐南の被害状態の拡大がつづく報道に心が痛む。可部線、芸備線不通の報道。安佐北区も可部周辺が大変らしいとの一報が届く。

次は「義援金」をどうするのか、との役員の問い合わせに、安佐北区社協へ慌てて問い合わせるが“未定”との返事。ボランティアセンターの立ち上げと共に、22日

緊急社協会長会議開催の連絡が来る。

それに対応して夕方5時から各自治会長を含む事務局会議を招集。社協会長会議の中で可部東、三入、大林など安佐北区内の多数の土砂崩れ被害報告を受け、翌23日からボランティア活動に取り組むことを決定する。とにかく出来ることを直ちにしなければと腹を決める。

殺到するボランティアにセンター対応しきれず

23日9時、とりあえず役員を中心に12名でボランティアセンターへ駆けつける。報道される眼を疑うほどの災害と人的被害。急きょかけつけていただくボランティア人々の波。

安佐南区のボランティアセンターでは対応しきれず、その波が安佐北ボランティアセンターに押し寄せる。その表現が正しいかどうかは判らないが、全く対応しきれないボランティアセンター。

それはそうだろうと思う。全く想定していなかったこと、センターの人々も全く経験し

ていないこと。必死に動いても人の波は処理しきれない。具体的指示のないまま午前11時今日の「ボランティア活動は打ち切る」しかない判断し現地解散とした。

翌24日（日曜日）午前3時ごろ、またも激しい雨。その後も雨がパラツキ午前6時、今日の行動は中止と判断。その後雨あがる。

午前9時頃センターに行く。前日同様ボランティア殺到し対応困難と判断、午前9時半頃「本日受付中止」となる。以降昼過ぎまでボランティアセンターに居ながら、「受付中止」のお詫びの頭を下げつづける。

頭を下げつづけながら、折角多くの方々の善意の気持ちをいただきながら、対応しきれない「中止」と判断せざるをえない状況について考えた。

原因としては3つ。一つは安佐南区ボランティアセンターが対応しきれず安佐北区ボランティアセンターに移って来られたこと。二つは、日曜日ということでボランティアの方々そのものが多数だったこと。三つはこれが最も深刻というか、根本的原因であるが、ボランティアセンター体制の不十分さにある。

直ちに広島市社会福祉協議会事務局 安佐北区社会福祉協議会会長に電話し、態勢確立にむけての必要な人材を市内全域の社協から派遣してほしい。また安佐北区社協として組織を挙げてセンター支援の態勢作るべき、との要請をする。

本来、私の仕事ではないことは判っていたが、押し寄せるボランティアの人々の波とその気持ちに応えるための「必要な行動であった」と自分としては納得している。

家屋内に流入した土砂との格闘

翌25日から現地可部東に向かう。現地に行かないと状況は判らない。報道は当然と言えば当然だが、安佐南区緑井、八木の被害状況と人的被害に集中する。



しかし安佐北区も大変。言葉がない。山裾の谷という谷がほとんど抜けているのだ。家も車も飲み込んで。

普段おだやかな小川というか谷川が一気に土砂と共に家の中に流れ込む。車も庭も畑も家も土砂に埋まる。どうすることも出来なかった。ボー然とただ身を守る以外何も出来なかった・・・。アッという間だった・・・。

深夜、豪雨と雷雨、稲光、真っ暗の中で避難も出来ず・・・。夜が明ければ泥の中・・・。

話を聞きながら、とにかく泥を出さなければと必死にみなと動く。

この泥がまた曲者。粘土質というか、スコップで採って土嚢袋に入れようとしても落ちない。手で掻き出さないといけない。作業効率は悪いし、疲れも倍加する。そんな作業を午前10時ごろから昼をはさんで午後3時まで。

それでも床下がきれいになれば「やった」という充実感はたまらない。そして何よりも被害を受けられた方に“何とかこんなものでどうでしょうか”と報告し、“ありがとう”と言ってもらえたときのうれしさは言葉に表せない。

失礼するとき“ありがとう。また来てね。”来るとは言えず、その言葉をグッと飲みこんで“元気で。がんばって”としか言えない。これはしんどい。

三入、大林とも一人暮らし高齢者や高齢者だけのお家が被災者の中にあまりに多かった。これからの暮らしはどうされるのか。これから生きる気力はどうなるのか。考えてみても答えはない。“がんばって”に万感をこめるしかない、というのがあの日々の現実だ。

度々重なる災害の教訓は生かされていたのか

あの日から早いもので2ヶ月が過ぎた。その2ヶ月間の中であの日のことが少しづつ忘れられていく。それはそれでしかたのないことであるし、ずっと関わり続けることは現実には困難。

今ふりかえってみて何が問題で、何が教訓として残されたのだろうか。

考えたことその1、行政の果たす役割、とりわけ組織のトップの果たす役割について。

これだけの災害は誰も予測できなかった、そう言えるのか、本当にそうなのか考えてみたい。

原因となった局地的、集中豪雨。今年は日本全国でひどかった。特に東日本各地は多大の集中豪雨が度々起っていた。

あの日、その教訓は行政の責任ある部署では想定していなかったのか。あれは他所の出来事だったのだろうか。いつどこで起こっても不思議ではない。いつ広島でも、という想像は出来なかったのか。広島市長の初動の遅れを含めて疑問と腹立たしさは時間と共に募る。

考えたことその2、ボランティアセンターのあり方、態勢づくりについて。

これだけの集中豪雨と被害。誰も想定していなかった事態、というのが果たしてそうなのか。広島市において過去、豪雨被害はたびたび起っている。広島県内においてもそうだ。その経験の蓄積が行政にないと本当に言いきれぬのか、と思う。



そしてもっとも今回の体験で腑に落ちないのはボランティアセンターの運営であった。

現在までボランティアセンターの中心を担った人々のことを言うのではない。彼らは本当によくがんばった。言葉の真の意味でがんばった。

しかし、それは何も判らない、何から始めてよいのか判らない中での必死のがんばりだったのではないか、と思う。

8月23、24日の両日、ボランティアセンターに居て、その状況を見て思う。

でも広島市の行政の中に、誰も経験した人はいなかったのだろうか、そうではないと思う。あの東日本大震災から3年、この間多くの行政に携わる人間が東日本に派遣され、現地の被災者、行政の方々とさまざまな経験をして来ている筈だ。

彼らはこの集中豪雨災害の中でどこで何をしていたのか。その経験を生かして現地で奮闘していたのか。

私にはそうは見えなかった。確かに幾人かこのような災害時におけるボランティア活動のプロ（こういう表現は適切ではないかもしれないが）の方が、献身的な行動と適切なアドバイスで救われたという話を聞く。それはそれで素晴らしい。しかし、彼らはボランティアのプロだ。

私の言いたいのは行政のプロはどこでどうしていたのか。8月24日（日曜日）午前中私はずっと安佐北ボランティアセンターに居た。9時30分、ボランティアが殺到する中で、対応困難として「受付中止」となった。それでも続々とボランティアの方々来る。“すみません受付は中止ですごめんなさい。”と頭を下げながら考えた。

何とかしなければ、と先にも述べたように広島市社会福祉協議会事務局と安佐北区社会福祉協議会会長に電話をした。

緊急に必要な会議を開くなり、現場応援の態勢づくりを要請した。私個人の判断だ。

それが良かったかどうか、私はよかったと思っているが客観的には判らない。はっきり言えることは、あの時の私にはそうする以外なかったということだ。翌日以降、必要な具体的対応がとられたか否かは検証できる立場にはない。

考えたことその3、若い人の素晴らしさ、ボランティアに感動、勇気と希望をいただいたこと。

8月23日から9月5日まで2週間災害救援ボランティア活動に取り組んだ。その内容は実働11日、準備態勢づくりはしたが中止は2日、中止1日延べ人員373人、単人員144人、作業家屋24カ所が実態である。

一緒に行った多くの地域の方々、現地で共に汗を流した方々、本当に沢山の方々が連日ボランティアに参加していただいた。なかでも若い人日のボランティアの多さに驚かされた。高陽東高校や山陽高校の学生さんとも一緒に。そして若い女性の多さ、がんばりにも驚かされた。菓子パンひとつで頑張る人もいた。

自ら志望して来た中学生とも一緒に泥かきをした。誰もみんな手を抜くこともせずひたすら泥を運んだ。

これは希望です。言葉の本当の意味で“希望”だ。ボランティア活動に取り組んでみて、いまの日本社会のさまざまな角度からの姿が見えた気がする。

これからの社協活動に少しでも生かすことが出来れば、被災された多くの方々の悲しみや淋しさ、怒りに応えることになる、といま確信している。

（報告 伊達 工）